作家本田靖春と仁川

1963年に起きた吉展ちゃん事件、リアルタイムでなくてもこの事件のことを知っている人は多いだろう。犯人の声を公開して、情報を集めたが、身代金が奪われていることもあり、一時は迷宮入りするのではないかといわれた事件である。テレビではドラマ化もされたこの事件、ドラマは本田靖春の『誘拐』を参考に作られた。

本田靖春は1933年京城生まれ、そのころ祖父は仁川で10名ほどの職人を使い、注文靴の製造をしていた。父は仁川商業卒業後、京城高等商業に進んだ。その後、朝鮮総督府に入ったが、京城で新しく設立された日本高周波重工業に転職している。

靖春は祖父が住んでいた仁川を幼いころ何度か訪れている。祖父の家の階下は全部作業場になっていて、そこで職人たちがソロバンを取り合った出来事があるという。年長の一郎がソロバンにペンで一郎と記名したが、それを二郎が取り上げ、横線を加えて二郎に変え、そして三郎がさらに一本横線を加えた。最後は五郎が三に縦線二本を加えたというもの。四郎もいただろうが、この話には登場していない。祖父は職人に入った順番で日本の名前を付けていたようだ。職人は全員朝鮮（韓国）人だったという。靖春はこの騒ぎを職人に肩車され、上から眺めていた。そして、名前を書きなおすために回ってきたペンをとりあげ、なんと肩車をしてくれていた職人の頭に突き立てたそうだ。職人はたまらず「アイゴー、ペン。アイゴー、ペン」と痛がり、その場は静まり返ったという。靖春は経営者の孫ということで咎められなかったようだ。

1937、38年ごろ、仁川の祖父が亡くなった。出棺の際、靖春は叔母と2人で留守番をしていた。そのときに港で大きな船舶火災があったことを覚えている。港に続く長い階段を駆け下りていく人の列と、港で勢いよく立ちのぼる白煙を2階の窓から見下ろしていた記憶があるという。

靖春は1971年に読売新聞社を退社し、フリーなって以降、仁川を二度訪れている。その際、仁川神社の前にあった祖父の家を探そうとしたが、いくら歩き回っても、祖父の家があった場所は見つからなかったそうだ。

参考文献

本田靖春『我、拗ね者として生涯を閉ず』講談社、2005

本田靖春『私のなかの朝鮮人』文藝春秋、1984